

パスカル『パンセ』をいかに読むか 『パンセ』の新版と「考える葦」

アラン・カンチオン

【解題】

アラン・カンチオン Alain Cantillon 氏は1957年生まれで、現在ソルボンヌ・ヌーヴェル（パリ第三）大学（仏語学仏文学・ラテン語学ラテン文学学科、17世紀文学専門）の名誉准教授である。GRIHL（グリール Groupe de Recherches Interdisciplinaires sur l'Histoire du Littéraire）の主要メンバーでもある。パスカル、ポール・ロワイヤル研究でも知られるルイ・マラン（1931-1992）の薫陶を受け、師亡き後は同名の協会を設立し、会長を務めている¹。

カンチオン氏によるパスカルについての著書、論文は多数あるが²、最も代表的な著書を挙げるとすれば、2014年にヴラン書店から上梓された『パスカルの一賭け——1660年から1850年に至る言表行為の連年に関する文学研究』（*Le Pari-de-Pascal. Étude littéraire d'une série d'énonciations*, Paris, Vrin, 2014）、ならびにパスカル生誕400周年に合わせて2023年にティエリー・マルシェッス書店より公刊された『パンセ』の最新批評校訂版（Blaise Pascal, *Pensées*, édition d'Alain Cantillon, Vincennes, Éditions Thierry Marchaisse, 2023）である。

カンチオン氏は2017年3月に訪日された折に、『パンセ』についての複数の講演を行なっている。日本ではGRIHLメンバーの野呂康氏（岡山大学）が積極的にカンチオン氏の業績を紹介されており、今回の訳注の一部でも参考にさせていただいた³。

¹ <http://www.louismarin.fr>

² <https://grihl.ehess.fr/index.php?327>

³ 野呂康「表象のパスカル：テキストの編纂と表象の試み」Alain Cantillon, *Le-Pari-de-Pascal : Étude littéraire d'une série d'énonciations*, Éditions de l'École des hautes études en sciences sociales : Librairie Philosophique J. Vrin, 2014 アラン・カンチオン『パスカ

二度目となる 2024 年 9 月の訪日は、同じくパスカル生誕 400 周年を記念して開催された『プロヴァンシアル』に関する日仏国際シンポジウム「不在と現在:『プロヴァンシアル』Entre Absence et Présence : les *Provinciales*」(企画責任者:野呂康氏)を契機とする。また「パスカル生誕 400+1 周年」と題して、本シンポジウムのほかにも 5 名の仏人研究者が登壇する多彩な学術的催しが企画された⁴。カンチオン氏の講演題目は以下の通りである。

- « La logique d'une pensée : l'écriture d'une pensée sur et contre la physique cartésienne de l'eucharistie » (2024 年 9 月 11 日、於日本女子大学)
- « Comment lire les *Pensées* de Pascal ? — Une nouvelle édition des *Pensées* et le roseau pensant » 「『パンセ』をいかに読むか——パスカル『パンセ』新版と「考える葦」」(2024 年 9 月 12 日、於武蔵大学)
- « Les *Provinciales*, production d'une conjoncture et intensification du temps présent de la lutte » (2024 年 9 月 14 日、日仏シンポジウム発表、於岡山大学)
- « Renouveler entièrement l'édition des *Pensées-de-Pascal* ; au nom de quelles raisons ? en vue de quels effets ? » (2024 年 9 月 16 日、於大阪大学): 大阪大学フランス語フランス文学会 *Gallia*、第 LXIV 号、2024 年度 (2025 年 3 月 1 日発行)、p. 229-242 に仏語原稿掲載。

本稿の元となった 2024 年 9 月 12 日の講演「『パンセ』をいかに読むか——パスカル『パンセ』新版と「考える葦」」は、武蔵大学人文学会、パスカル研究会、文芸事象の歴史研究会 (GRIHL 日本支部) 主催、日仏哲学会後援で行われた。カンチオン氏による最新批評校訂版『パンセ』の紹介が第一の目的であったが、同時に学生たちにもわかりやすい内容になるように配慮し、「考える葦」を主題とした内容をカンチオン氏に依頼した。講演前には学生たちにも翻訳原稿を渡し、質問を用

ルーのー賭け 言表行為の連なり』」、Prétexte : Jean-Jacques Rousseau, 2016 年 4 月 17 日 (http://pretexte-jean-jacques-rousseau.org/?page=pg03c_160402232322)。

同「パスカル学の現在 アラン・カンチオン、近代文学と文学の自明性への眼差し」附アラン・カンチオン「パスカルーのー賭け 異文混交の受難」(講演翻訳)、岡山大学ヨーロッパ言語文化研究会『ヨーロッパ言語文化研究』、第 36 号、2017 年 3 月、p. 19-55。

⁴ <https://sfjp-web.net/> パスカル生誕 4001 周年 - 日仏シンポジウム・講演 /

パスカル『パンセ』をいかに読むか『パンセ』の新版と「考える葦」アラン・カンチオン
意させた。新学期第一週に当たったが、院生だけでなく多くの学部生が参加し、カンチオン氏のお人柄や明快で雄弁なフランス語もあり、大変和やかで魅力的な講演となった。また、「考える葦」を主題としたことで、自筆／異筆で二部構成を取る革新的なカンチオン版の特徴も十分に伝わったと思う⁵。講演後の質疑応答については、録音内容をカンチオン氏自身が確認し、文章に起こしてくださったものを全訳し、講演翻訳の続きに掲載した。講演時の回答を増補した箇所があるほか、講演内容を敷衍する箇所も複数あり、講演本文をよりよく理解する一助となるであろう。

ブランシュヴィック版に慣れた日本人読者の中には、ラフュマ版など写本に基づく『パンセ』翻訳は読みにくく、パスカルが遠くなったという感想をもつ人もいる。学生たちが初めて触れる場合も、写本の束 liasses（章、ファイル）内部の断章がばらばらに見えるため、書物としてテキストの中に入っていくのが難しい。ラフュマ版以来定番となった、写本に基づく『パンセ』はある意味で専門家を対象とした書物になってしまった感もある⁶。写本配列を退けるカンチオン版は、原文に対する厳密で科学的な編纂原理に立脚しつつ、ブランシュヴィック版が提供していた、『パンセ』を一冊の本として読む楽しみを（フランス語ではあるが）復活させたとも言える。また本書のサイズや紙質もたいへん手に馴染みやすく、工夫されている。パスカル生誕 400 年を記念するのはもちろん、今後広く読まれるべきエディションだと思われる。

（解題執筆 望月ゆか）

⁵ 筆者は個人的には「考える葦」のカンチオン氏解釈とは異なる見解を抱くが、それについては 2026 年 2 月刊行予定の法政大学出版局『パスカル読本』収録の「パスカルのキリスト教的人間観 ―「考える葦」再考」を参照していただきたい。講演前のカンチオン氏とのプライベートのやり取りも大変興味深く、考察にあたっての貴重な材料となった。ここに改めて感謝の意を表するものである。

⁶ 写本配列の読みにくさを補うために、たとえば塩川徹也訳（岩波文庫全三巻、2015-2016 年：以下、塩川訳『パンセ』と略称）の下巻には、『パンセ』導入の道標として「アンソロジー」が収録されている。しかし、残念ながら下巻後半部のため、その存在に気づかれにくい。また田辺保は『パンセ』の翻訳を複数行ったが、ラフュマ版完訳（『パスカル著作集』第 6・7 巻、教文館、1981-1982 年）を出したのち、アンソロジー『パスカルの言葉』（人生の知恵 10、弥生書房、1997 年）を新装復刊したほか（初版、1970 年）、啓蒙書も新たに刊行した（『パスカル 痛みとともに生きる』、平凡社新書、2002 年）。

パスカル『パンセ』をいかに読むか 『パンセ』の新版と「考える葦」 (講演)

アラン・カンチオン

2024年9月12日(武蔵大学)

講演翻訳(沖本龍哉・望月ゆか⁷⁾)

＜本文中の括弧のうち()は著者による補足、〔 〕は訳者による補足である。＞

親愛なる同僚、ならびにご列席のみなさま、

長い年月を費やしました『パンセ』のこの新しい版⁸を紹介する機会を賜りましたことを、大変嬉しく、また光栄に存じます。まずここに感謝申し上げます。とりわけ、招待と準備に当たられた望月先生、翻訳作業を担当された沖本氏、またいま私が日本にいる喜びを与えて下った大元の恩人である野呂先生に、お礼を申し上げます。

はじめに、この編纂作業の基盤となったいくつかの事実を再確認したいと思います。

- ・1662年にパスカルが亡くなった時、彼の近親者たちは、その大部分がパスカル直筆である、大量の手書き書類を発見した。
- ・彼らは、その書類の写本を作成させた(二つの長大な写本が現存している)。

⁷ 講演翻訳は、沖本がまず下訳を行い、その後望月が全面的に手を入れた。亀甲括弧〔 〕は望月による補足である。翻訳・訳注上の不備は、すべて望月の責任に帰する。

⁸ [訳注] Blaise Pascal, *Pensées*, édition d'Alain Cantillon, Éditions Thierry Marchaisse, 2023.

- ・1669年と1670年に、彼らはパリのギヨーム・デブレ書店から、『死後書類の中から見出された宗教および他の若干の主題に関するパスカル氏の断想集』初版〔(いわゆるポール・ロワイヤル版『パンセ』)〕を刊行した。
- ・この版は、長い年月を経て1842年にヴィクトール・クザンがアカデミー・フランセーズの報告において論証したとおり、きわめて不完全で、とりわけ改竄が施されている。これらの改竄は、とくに宗教的教義の問題点について、論争や断罪の回避を目的とするだけのものではなかった。じっさい、文体も修正の対象となっており、そこからクザンは1842年〔の報告で〕、〔ポール・ロワイヤルの〕編者たちはパスカルの著作を公刊する際にそれを「台無しにしてしまった」と非難したのである。
- ・〔パスカルの残した〕これらの文章類は、あまりに未完の状態であるため、『パンセ』の新版はどれもが必然的に新たなテキストを生み出すことになる。
- ・紙片類はひどく乱雑なまま、放置されていた。
- ・これらの文章類の一つひとつが、ある〈パンセ〉をどこで区切るか、どのよう⁹に解説するか、そのさまざまな部分をどのような順序で配列するか、といった^{へんさん}編纂に関わるあらゆる問題を個別に提起している⁹。

本日は、現時点での主要な版を紹介し、それらを乗り越える必要があると私が考える理由と、編纂についての私の提案がどのような意義をもちうるのかについてお話しするにとどめたいと思います。

⁹〔訳注〕たとえば「賭けの断章」は二枚の紙の表裏に直筆で書かれているが、その余白には約十のメモが書き込まれている。すべてを一つの断章にまとめる版もあれば(セリエ版、ルゲルン版)、連続する九つの断章とする版もあれば(ラフュマ版)、十に分けて方々にちりばめる版もある(プランシュヴィック版)。アラン・カンチオン「パスカルの―賭け 異聞混交の受難」(野呂康訳)、『岡山大学 ヨーロッパ言語文化研究』第36号、2017年、31ページ。なお、塩川訳『パンセ』は、ラフュマと同様の原則による配列となっている(岩波文庫、中巻、2016年、47-67ページ)。

今日の主要な版は、ラフュマ版、ミシェル・ルゲルン版（なかでも、「プレイヤード叢書」のオーラを帯びている版）、そして、さまざまな形で刊行されたフィリップ・セリエ版です。

以上諸版の差異には分け入らず、それらを結びつけているものに焦点を当てることとしましょう。それらは、いずれも、ルイ・ラフュマによって光を当てられた原則を適用しています。それはすなわち、写本の秩序に従う、より正確に言えば、伝統的に「第一写本」と呼ばれるものの秩序に従うという原則です。ミシェル・ルゲルンはこの点について、異論なく「第一写本」に従います。しかし、フィリップ・セリエは、「第二写本」といわれる写本の方を好みます。というのも、それは（パスカルの姉である）ジルベルト・ペリエが保管していた写本であり、従って、もう一つの写本、来るべき〔ポール・ロワイヤル〕版の編集作業用の写本だったとされている「第一写本」よりも忠実であると考ええるからです。

どちらも、＜パンセ＞の一部——全体の半分よりやや少ない量——を30弱のセクションに細分化したものを写本の先頭に配置しており、セクションタイトルのリストからなる目次がその冒頭に置かれています。両写本とも目次から始まっているわけですが、これについてはパスカルの手によるいかなるバージョンも知られていません。

ラフュマ型の版は、以下の仮説に依拠します。これらの区分が、著者パスカル自身が作成したであろう、そして死後、そのままの状態で見えられたであろう「〔＜パンセ＞の〕東」を再現している、それも忠実に再現している、という仮説です。「東」と呼ばれるのは、糸と針を使った、当時よく見られる書類の分類方法です。紙の隅に小さな穴を開けて、糸を通し、紙片を次々に追加していく、東は結び目によって閉じられたのち、また結び目が解かれて紙片が足され、と時を追いつながりながら必要に応じて再構成されていくというものです。

さて、〔東の集積として構成された写本に依拠する〕この編纂の伝統はむしろ断ち切るべきもののよう、私には思われました。それは、「パスカルのーパ

パスカル『パンセ』をいかに読むか『パンセ』の新版と「考える葦」(講演) アラン・カンチオン 沖本 龍哉・望月 ゆか
ンセ¹⁰」という死後誕生した存在に新たな契機を開くためです。そこには、異なる二つの次元に属する、相互補完的な理由があります。

1) 文献学的な諸理由

私がこれらの理由を初めに置くのは、それがまさに、私が実行すべきであると信じた編纂刷新行為の根拠となっているからです。

束の仮説は、私にはかなり根拠薄弱に思われます。その仮説は、初版の「序文」の相互に補完しあう二つの主張に依拠しています¹¹。さて、この序文は、その紹介する版が、「それらが見出されたままの姿で、ある種の秩序のうちに配置する以外は、何の追加も変更も加えずに」『パンセ』を提供すると明言していますが、今日、われわれは、この序文を文字どおりに受け取ることができないことを知っているのです。

つまり、この序文は次のように述べています。「(紙片は) すべて紐で結わえたさまざまの束にまとめられたものとして発見されたが、そこには、いかなる順序も、いかなるつながりもなかった。」そして「人々が最初に行ったのは、紙片をそれがあるがままに、見出されたときと同じ混乱状態において筆写させることであった。」[序文によれば] そこには無秩序が、「混乱」があった、そしてこの無秩序は事実上、写本作成の操作によってある一つの秩序に変換されたというので

¹⁰ [訳注]「パスカルーのーパンセ *Pensées-de-Pascal*」とは、カンチオン氏の主著『パスカルーのー賭け 言表行為の連なり』(Alain Cantillon, *Le Pari-de-Pascal : Étude littéraire d'une série d'énonciations*, Paris, Vrin/EHESS, 2014) に由来する独自の批評概念である。「パスカルーのー***」とあえて作家への帰属を強調するハイフン記号を用いることで、読者がある作家の作品として読んでいるものは、作家の純粋な思想の表象ではなく、じつは作家の残したテキストに編纂者が加えた操作の開かれた集成であることに注意を促している。作家のテキストの編纂作業そのものが、新たな別のテキストを生産する言表行為と定義され、そこには編纂者の歴史性、イデオロギーが纏わりついている。野呂康氏による本書の前掲オンライン書評を参照—「表象のパスカル：テキストの編纂と表象の試み Alain Cantillon, *Le-Pari-de-Pascal : Étude littéraire d'une série d'énonciations*, Editions de l'École des hautes études en sciences sociales : Librairie Philosophique J. Vrin, 2014 アラン・カンチオン『パスカルーのー賭け 言表行為の連なり』」

¹¹ [訳注]「ポール・ロワイヤル版(1670年)の序文」全体は塩川訳『パンセ』下巻、2016年で読むことができる。本講演で扱われている部分は243-246ページである。

す。ラフュマは、両写本によってなされたこの秩序づけにおいて、前半部分に配置された章〔ラフュマ版第一部、第1～第27章〕が、〔パスカルの死後残された〕これらの「束」を真正な形で復元していることを示そうと試みます。しかしながら、彼は仮説の域を出ることはできません。ところで、われわれは束についての自筆目次が存在しないこと、両写本中に存在する二点の章目次には、「目次」というタイトルすら付けられていなかったことを知っています¹²。その上、ラフュマ自身はこの章目次を〔『パンセ』の一部として〕公刊しませんでした¹³。

したがって、目次のこれらの章と、パスカル自身によって作られたとされている束との間の関係には、大きな不確実性が付きまっています。

初版の序文は、実際に起こったことの正確な証言としてではなく、二つの目的をもつ言表的行為として受け取るべきです。一つ目は、今見てきたように、読者の信頼に値する出版物としての初版を提示すること、二つ目は、後世にアピールすることです。じっさい、彼らは忠実な写本を作成させたと宣言しただけでなく、すべてを刊行することはできなかったとも宣言しています。長い注釈を加えなければ理解しがたいがゆえに刊行を断念したとされる〈パンセ〉の一例まで挙げています¹⁴。メッセージは明快です。複数の〈パンセ〉は出版されずにアーカイブ化されたということです。このメッセージの理解は容易でした。というのも、これらのアーカイブからすぐに、未発表のいくつかの〈パンセ〉が現れましたから。

2) 編集それ自体に関わる諸理由

レイ・ラフュマは、パスカルが亡くなった際にその紙片類が置かれていたとき

¹²〔訳注〕写本の写真版は *Les Pensées de Blaise Pascal* の以下のリンクを参考。
<https://www.penseesdepascal.fr/General/TDM.php>。塩川訳『パンセ』上巻27ページの写本目次の翻訳および解説を参照。

¹³〔訳注〕ラフュマ版ではタイトルの目次は、写本にはない各章番号を付されたうえで、第一部（Section I）の目次および／または版本全体の目次へと変換された形で掲載されている。初期の版では、目次タイトルの一部にも変更が施されている（束の本文本体に記されたタイトルが目次のそれより詳しい場合は前者との差し替えなど：例えば、「優越」が「14 神を証明するこの方法の優越」へ）。

¹⁴〔訳注〕塩川訳『パンセ』下巻、246-249ページ参照。

れる秩序(順序)を発見し、刊行することによって、構成をめぐる尽きることのない問題を解決したと信じました。これほど不確実なことはないとわれわれが考える根拠については、これまでにご説明してきました。それに、たとえその通りであったとしても、両写本の示す構成が実際にそうした秩序を忠実に再現しているとしても、その秩序には編纂上の価値はあまりないでしょう。というのも、それはいかなる意味でも、著者が自分の書いたものを公に伝えるために、出版するために、練り上げた構成ではなく、ラフユマの仮説によってもせいぜい、来るべき著作を見据えた、個人的用途のための、暫定的分類にすぎません¹⁵。＜パンセ＞は、さまざまな章またはタイトルにおいて、読書の助けになるように構想された順序や展開に従って提示されているわけではないのです。

近親者たちの作業によりもたらされた伝統への批判的回帰は、われわれにとって欠かすことのできない営みですが、その過程で私は、自筆(*autographes*)と異筆(*hétérographes*)¹⁶のあいだに通常打ち立てられている関係を再検討するに至りました。その関係は非常に堅固なので、テーマ立ての対象になっていません。慣習的に、加えて、J. メナールがパスカラン(パスカルの近親者たち)と名付けた人々¹⁷に対するパスカル研究者たちの一種の愛着によって一般的に、異筆は完全に信頼できるものであるとみなされています。この信頼は非常に強いので、ときに自筆＜パンセ＞

¹⁵ [訳注] ラフユマの仮説とは、パスカルが始めた分類は、1659年1月から2月にかけて突然病が悪化したため中断され、その状態のまま著者の死が訪れた、というものである(*Pensées*, Ed. du Luxembourg, 1951, t. I, p. 16)。

¹⁶ [訳注] 異筆 *hétérographes* とは口述筆記、写生字や编者による書き込みなど自筆以外のみからなる筆跡を指す。野呂康氏は「異文混交」と訳している。アラン・カンチオン「パスカルの－賭け 異聞混交の受難」(野呂康訳)、『岡山大学 ヨーロッパ言語文化研究』第36号、2017年参照。

¹⁷ 【原注】「パスカラン」の語はすでに、マリー・ペルーズ Marie Pérouse の論文(*Littératures*, n° 55, 特集「パスカルは『パンセ』を書いたのか? *Pascal a-t-il écrit les Pensées?*」所収、[2027年、p. 37, n. 16])が述べているように、『雑纂集 *Recueil de choses diverses*』(ルソーニエ編、267ページ [J. Lesaulnier, *Port-Royal insolite : Édition critique du Recueil de choses diverses, 1670-1671*, Paris, Klincksieck, 1992])で用いられている。望月ゆか氏からの指摘による。

ではなく異筆＜パンセ＞のほうに、より価値を与えてしまうほどです¹⁸。近年〔2015年〕、セリエ版に関する論争が日本から提起されましたが、これは、パスカル研究がおかれている、次のような編纂上の異常な事態に対して背を向けるために、私が

¹⁸ [原注] A167 は、セリエ版では H12 の「準備メモ」とみなされている。

[訳注 1] カンチオン版（以下、適宜 C 版と略称）の特徴の一つは、写本準拠の版のようにタイトル付きの束に分類された＜パンセ＞とそれ以外の＜パンセ＞を区別するのではなく、自筆 Autographes の部と異筆 Hétérographes の部を区別する点にある。断章番号の前にはそれぞれ A, H の記号が付され、A には自筆原本集 (R) のページが添えられている。異筆は全体の 5 分の 1 強に相当する (*Pensées*, éd. Cantillon, Introduction, p. 24)。カンチオン版による「自筆」の部にはパスカル自身が書きつけた狭義の「自筆原稿」のほか、もともと他人の筆跡で書かれた断章（口述筆記など）にパスカルが自筆で訂正や加筆を行なった、広義の「自筆」を含むことに注意 (*Ibid.*, p. 25)。A167 は後者の一例である。[訳注 2] A167 の原本 (R205) には大きく縦の棒線が引かれている：

<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k9464p/f110.item>。パスカルは他の断章への発展として利用した断章にこのような消し線を引くことが多いため、通説では A167 の大半は同主題の H12 の執筆に利用され、用済みになった、つまり A167 は H12 の準備メモとみなされている。ちなみに第一写本では縦の棒線の代わりに斜めの棒線で消し線が引かれ、欄外の書き込みは基本的に同じく欄外に記されている。パスカルが文中に修正を施した本文は、最終形で清書がなされている。「第一写本」、p. 426-428 : <https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b100765519/f440.item>。「第二写本」、p. 399-400 : <https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b6000694t/f366.item>。カンチオン版「パンセ」の序文では、縦の消し線がパスカルのものかは不確実であり、パスカルがこの断章の削除を意図したのかも不明、仮にパスカル自身の消し線だとしても、別の断章として展開し、その自筆原稿が失われた可能性もあると述べられる (Introduction, p. 26)。ここから、次の訳注 3 で述べる仮説が導かれる。

[訳注 3] カンチオン版では、無神論者に対する長大な論説からなる H12 を、ポール・ロワイヤル編者による文章、つまりパスカルによって書かれたのではない偽書 apocryphe とみなす。その論拠は以下のとおりである (Introduction, p. 26-27; H12, note 1, p. 197)。

1. H12 には複数の「自筆」からの引用（とりわけ A167）が含まれる。

2. H12 は、「自筆」からの引用よりも、文体がしばしば平板である。たとえば A167 の « par bigoterie 偏狭な信心 » が、H12 では « par le zèle pieux d'une dévotion spirituelle 霊的な信心の敬虔な熱意 » になっている (Introduction, p. 27; 翻訳はそれぞれ塩川訳「パンセ」、中巻、508、73 ページ)。

3. H12 の論説は、いくつかの修正を施されて、ポール・ロワイヤル版『パンセ』の第一章「無神論者の無関心に抗して」を構成している。ポール・ロワイヤル版第二版 (1670 年)、p. 1-18 :

<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k1511234f/f85.item>。

「第一写本」f. 209-217 : <https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b100765519/f221.item>。

「第二写本」f. 419-429 : <https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b6000694t/f386.item>。

4. 以上の二重の関係から、すなわち一方は自筆原稿と、もう一方は初版編纂の見事な異筆作業から、この論説が偽書であると考えるにいたった。

[訳注 4] A 167、H12 について、従来の諸版における該当番号は以下のとおりである。

H12 : S (セリエ版) 681、L (ラフユマ版) 427、Br (ブランシュヴィック版) 194。

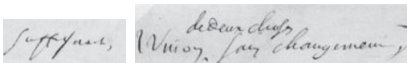
A167 : S662、L432、Br 194bis (194-2)。なおラフユマ版は複雑で、L432 が 2 つある（どちらも L427 の準備メモとみなされている）。A167 に対応するのは二つ目の L432 で、第二部「分類されていない＜パンセ＞」の第 30 セクション、L821 と L822 の間に置かれている。

提案しようとしていた根本的な変更の試みを後押ししてくれました。その異常な事態とは、自筆が現存し、さらにその自筆の著者自身によっていかなる出版行為も行われなかった場合に本来示されてしかるべきである自筆と異筆の差異が、忘れ去られているということです。

ある<パンセ>は、写本によってしか知られておらず、二つの写本の間にある一致は、誤りやさらには改変が介在しなかったという保証にはなりません。そのうえ、自筆<パンセ>が貼られている文集にはまた、異筆<パンセ>もかなりの数で含まれています。あるいくつかの不完全で、書きかけでさえある自筆<パンセ>は、写本によって「補完」され、これまでの〔仏語〕諸版は、これら異筆の単語を〔自筆と区別せずに〕再録しています。写本にしかない単語が改変されていた可能性など、ありえないとでも言わんばかりに。

私の版の最後の特徴についてご説明しましょう。自筆特有の性質に注意を払うということから、可能な限りオリジナルの句読点を尊重するという要請が生じてきました。この尊重は機械的でも絶対的でもありえないことは十分に強調する必要があります。それは繊細な作業です。多くの場合、疑問は解消されずに残されます。とりわけ、あるいくつかの語末文字、たとえば「e」の筆運び(ductus)の最後の部分〔であって、句読点ではないだろうと私が仮説を立てたケース〕についてです¹⁹。さらに、オリジナルの句読点を補完したり、またときには別の句読点に置き換え

¹⁹ 【原注】例えば、p. 73 [A57], note 3 ; p. 208 [A133], notes 2, 4 ; p. 209 [A133], n. 1。
〔訳注〕カンマやピリオドと解説されてきた箇所は、カンチオン版では単語末尾のeの払いの最後の部分が途切れて残ったという仮説が立てられる。A57, p. 73 (R198) で問題にされているのは、「*« Il ne distingue la condition necessaire d'avec la condition suffisante »* の「*suffisante*」の後にカンマをつけるかどうかであるが、該当ページは以下のとおりである(以下左側写真)：
<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b52504189f/f243.item>。
同断章(R198)の前の部分にある自筆カンマ*« L'union de deux choses sans changement, ne fait point qu'on puisse dire que l'un devient l'autre »*(以下右側写真)とは形状が異なっている。



たりする必要もあります。ただし、これまでの版とは異なり、句読点の書き換えを最小限に留めることにこだわりました。書き換えたのは、現代の用法にあまりに反している場合、さらにはこれらの〈パンセ〉が書かれた当時の用法に照らして誤用である場合に限定しました。そして、句読点の書き換えを行なった場合は、それをつねに脚注に明記しました。異なる二種類の句読点は、印刷上の手法で区別されています。オリジナルの句読点は灰色で、〔写本作成や『パンセ』編集の段階で第三者によって〕加えられた句読点は黒色です。

これまでのどの版よりも、オリジナルの句読点に忠実な、この新しい句読点は、人々が習慣的にパスカルに帰するものとは異なる言説を立ち現せてくれます。すなわち、これまで思われていたよりもなめらかなつながりをもち、ごつごつした感じが少なく、ゆったりしたリズムの言説、多くの場合やわらかくバランスを取りながら、執筆作業が進んでいく過程で生まれてくる〈パンセ〉の言説です。われわれが目にするのは、読者に荒々しく迫ってくる雄弁のリズムによって、修辭学上の文節がすこぶる強調された、あのブツ切れの短文体の散文〔『パンセ』の特徴的文体とみなされているもの〕からはかけ離れたものです。諸版は、カンマで足りるところに、ピリオドを加えたり、さらには必然性もなく、カンマをピリオドに置き換えることまでして、原文の実際の句読点、実際のリズム、実際の言説の性質を修正しようとする傾向があります（後ほど、一例を挙げながら見てみます）。

われわれがパスカル研究の伝統に対し、この新しい版によって導入する以上三つの変革は、すべて同じ方向を向いています。つまり、「パスカルのーパンセ」という未完の言説のもろさに対し、最大限の尊重を払うということです。〔第一に〕われわれは、同定可能な限りにおいて、オリジナルの句読点を尊重しました。また〔第二に〕、パスカルの手によるものとそうでないものとを区別し²⁰、この言説に、近親者たちによって滑り込まれてしまったかもしれない変更を押し付けないようにしました。彼らは全く誠実に、たしかに非常に善意によってそのようにしたのでありますが、パスカルの言表や言表行為を必ずしもすべて理解して行った

²⁰〔訳注〕自筆と異筆を別々の部に分けること。

わけではありません。〔第三に〕構想を決定的なものとして提示し、押し付けることは避け、欠落も補足不能な空白もなしで、言説全体の構築が可能な秩序を発見した、あるいは再発見したかのような印象を読者に与えてしまわないよう留意しました。

この新しい版で提案する構成は、厳密に言えば、ある数の「テーマ群²¹」を通じた読書の行程を示すものにすぎません。それは、〔パスカルが生前準備していたとされる〕ポール・ロワイヤルのカトリック思想を擁護する護教論の構成に代わるような組織化を提示して、パスカルが残した著作をそれに無理やり従わせるようなものでもなく、(ブランシュヴィック版のように) 著者の思索の論理を復元しようとするものでもありません。〈パンセ〉分類の操作による私の狙いはただひとつ、これらばらばらの文書類を通して〔読者への〕道案内をすることです。セクションのタイトルはパスカルの文書〔『パンセ』〕それ自体から抜き出したものです²²。それぞれのテーマ群の内部は、もっとも理解しやすい〈パンセ〉から始め、次いで、関心を新たにしないいくつかの断絶²³をときに挟みながら、発展していくよう配列しました。

それではこれから、この新版による修正(また、私が思うに、この版によってもたらされる著しい改善)の一例をお示ししましょう。この講演の主題を考えるにあたり、望月先生は、日本のパスカル研究の伝統において、「考える葦」が『パンセ』の中でとくに重みをもっているという点に注意を向けてくださいました。さらに鈴木真太郎氏のフランス語論文「日本におけるパスカル『パンセ』受容に

²¹ [原注] この用語は、ジェラルド・ホールトンから借用し、多少自由にアレンジしたものである。とくに『科学的思考のテーマ的起源：ケプラーからアインシュタインまで *Thematic Origins of Scientific Thought : Kepler to Einstein*』(初版1973年、改訂版1988年)を参照。

²² [訳注] 例えば、後で引かれる第一セクションのタイトル「無限の中であって、人間とは何か」は、「二つの無限」と呼び慣わされている〈パンセ〉の一文から取られている(A3: S230-L199-Br72)。カンチオン版では、セクションのタイトルは自筆の部と異筆の部の同番号セクションで共通しているので、両者の内容を容易に比較できる。

²³ [訳注] 「断絶」とは、一目見ただけでは意味がわからないが、読者の関心を引く短い断章を指す。以下、「考える葦」の考察で挙げられているA47がその一例である。

関する考察：「考える葦」を通して²⁴」も参考にすることができました。

お手元には、両面印刷で三枚の引用資料が配布されています〔本稿の最後に収録〕。それぞれに、ミシェル・ルゲルン版、フィリップ・セリエ版、そして、私の新版による「考える葦」の＜パンセ＞が載っています。

「考える葦」の＜パンセ＞〔には二種類あるのですが、〕それぞれの欄外には、角が丸い長方形  または  の目印を付けました。

すぐに見て取れることは、写本構成に従う版では、これらの＜パンセ＞を「偉大さ」、次いで「人間の認識から神への移行」と、二つの「東」に分けているのに対し、以上の構成に拘束されない立場を取るわれわれの版では、二つの＜パンセ＞をセットにできるということです²⁵。これはかなり大きな意味合いをもってきます。「考える葦」は、最初のテーマ群「無限の中にあって、人間とは何か」（第一部「自筆原稿の＜パンセ＞」）の終わりの方に置かれています²⁶。その箇所は、より正確には、精神と物質のあいだの関係（物質性、物質、霊魂、そして思考）が問題とされている部分です。

もし連続性において〔『パンセ』を〕読むことに関心をもつのであれば、われわれが行ったようにこの二つの＜パンセ＞をまとめて配置することが重要だと思います。別種の共テキスト化を行うこと *cotextualisations* はもちろん可能で、

²⁴ [訳注] Shintaro Suzuki, « Réflexions sur la réception des *Pensées* de Pascal au Japon à travers le “roseau pensant” », *Acta Litt&Arts*, (10), Mai, 2019.

²⁵ [原注] 二つの＜パンセ＞はブランシュヴィック版でも並べて配置されているが、順序は逆である。目次では「考えることの尊厳」というタイトルがつけられたセクションの導入部分に置かれている。この導入の後のサブテーマは順に、「ストア主義」、「ピュロニズム」、「人間の偉大と悲惨」である。

[訳注] 言及されている「目次」はブランシュヴィック版『パンセ』三巻本（1904年）の第三巻末に見られる。ブランシュヴィック文庫版では、セクションのタイトルは「哲学者たち」と変更されている。「世界の名著シリーズ」前田陽一訳『パンセ』は後者を用いている。

²⁶ [訳注] 「無限の中にあって、人間とは何か」の自筆セクションはA1～A66の断章から成り、「考える葦」はA43-44である。A43はS145-L113-Br348、A44はS231-L200-Br347に相当する。

パスカル『パンセ』をいかに読むか『パンセ』の新版と「考える葦」(講演) アラン・カンチオン 沖本 龍哉・望月 ゆか

正当です(電子版²⁷は言うに及ばず、また用語索引を利用して)。しかし、読者には『パンセ』という書物と思想に分け入ることを容易にする最初の共テキストの布置を提供することが必要です。

「考える葦」の二＜パンセ＞を、〔プランシュヴィック版とは逆の〕われわれの順序で結合することで、〔第二のテキスト A44 中の〕「しかし、それは考える葦である」という譲歩の意味が、すぐに理解できます。なぜなら、一方で空間／宇宙、他方で思考という、これら両者の対立はすでに二＜パンセ＞の第一〔A43〕で提示されているからです。

私は、読書を進める上でこの秩序(順序)がもつ利点を示すために、引用資料のなかでは、「考える葦」に続く、七つの＜パンセ＞も挙げました。「考える葦」は、人間の思考の力と偉大さを強調しますが、それは「パスカルのーパンセ」の言説の大きな揺れ動きの中の、ほんの一時にすぎません。それは、「それぞれの真理の行きつくところ、それに加えて、反対の真理を思い出さなければならない」(C版、A92²⁸) ことを前提とする、シーソー運動²⁹です。A46³⁰では、偉大さが出てきた後、すぐに卑しさもやって来ます。そこで、一服するように、人間の悲惨についての、A47の短く謎めいた＜パンセ＞を加えてみました——そこで好奇心をそそられた読者は、巻末索引を用いて、別の＜パンセ＞へと導かれることが可能です。そちらは異筆の部ですが、悲惨、サロモン、そしてヨブの関係が明示されています³¹——。A47の後には、「考える葦」としての葦のもつはかない弱さを、さまざまな方向へ発展、深化させる＜パンセ＞が続きます。

²⁷〔訳注〕カンチオン氏によれば、CDRom 版 Pascal, *Œuvres littéraires complètes*, Champion Électronique, 1998、あるいは今後現れるかもしれない同種の電子版を念頭に置いているとのこと。

²⁸〔訳注〕S479-L576-Br567。

²⁹〔原注〕この動きは、その必然性と、その美的かつ倫理的効果の点で、ルイ・マランによって見事に分析された「鹿おどし」の動きと比較しうる (*Lectures traversières*, A. Michel, 1992, p. 263-266 を参照)。

〔訳注〕ルイ・マラン「上下する竹 Le bambou à bascule」(柴田道子訳)、『TRAVERSES 5／ニッポン』(今村仁司監修)、リプロボート、1990 年所収。

³⁰〔訳注〕S626-L756-Br365。

³¹〔訳注〕H8；S22-L403-Br174。

時間の制限もありますので、句読点について、また、自筆と異筆を区別する必要性についてごく簡単に指摘して、「[考える葦]」についての考察を] 終えたいと思います。

句読点については、セリエ版とルゲルン版が、パスカルの戯画と述べても言い過ぎではないようなものを生み出していることが、容易に見て取れます。たとえば〔A43; S145-LG104-L113-Br348 の〕「自分の思考を整えることによって du règlement de ma pensée」や〔A44; S231-LG186-L200-Br347 の〕「しかし、それは考える葦だ」の後のカンマは、ピリオドに置き換えられています。

自筆と異筆の混同に関しては、われわれの版の脚注2を参考にして³²、セリエとルゲルンの抜粋を見ていただくと、混在があるのがよくわかります。まず、「人間は一本の葦にすぎない…」の<パンセ>について、自筆部分と異筆部分からなる奇妙な組み合わせに気づきます（これはルゲルン版についてです、——というもの、セリエ版は自筆、異筆の順でそれぞれ別個の二つの<パンセ>として配列しているからです、ただしそれらの違いについては注記がありません——³³）。自筆と異筆の混同が起きている本ケースでとくに強く印象づけられるのは、異筆部分が、自筆部分では単に存在論的、人間論的でしかない思想に対して、道德的、さらには護教論的な関心を追加していることです。またそれだけでなく、(『ポール・ロワイヤル論理学』の護教論的狙いを想起させる) この追加は、思考という人間のこの尊厳を逆に貶める A46 と矛盾します³⁴。前世紀の日本の倫社の教科書でこの異筆部分を削除して<パンセ>を引用した編集者たちは、この意図の違いに敏感だったことを示しています。もっとも彼らはおそらくブランシュヴィック版（あるいはこれに依拠した翻訳）を用いていたことも付け加えておく必要があ

³² [訳注] カンチオン版の注記の内容は以下の本文と内容的にはほぼ同一である。

³³ [訳注] 自筆と異筆の混在については、塩川訳『パンセ』を参照（断章200, 注3）。

³⁴ 【原注】A46は〔写本準拠の『パンセ』では〕、「分類されていない<パンセ>」に含まれる。セリエ版（S626）では「Les Pensées 4」、ルゲルン版（LG636）では「セクション26、雑」に収められている。

[訳注] L756-Br365。

パスカル『パンセ』をいかに読むか『パンセ』の新版と「考える葦」(講演) アラン・カンチオン 沖本 龍哉・望月 ゆか
るでしょう。ブランシュヴィック版では脚注に「この第二段落は写本によってのみ伝えられている」と記していますから。

【講演 質疑応答】

【句読点について】

<質問①>

句読点についてオリジナルに近い忠実な版を意識されたということだが、そもそもなぜ、オリジナルの句読点だけを示すことをしなかったのか。

<回答>

句読点が欠けている場合がしばしばあり、フランス国立図書館のインターネットサイト Gallica (ガリカ) を参照すればわかるが³⁵、句読点がまったくなく<パンセ>すらある。句読点を補足しなければ、読者自身にそれを補う作業をさせながら読ませることになり、真の意味での編纂作業を行なったとは言えない。

<質問②>

なぜ、より重要なパスカル自身の句読点を目立つ黒にして、補足した編纂者の句読点を目立たない灰色にしなかったのか。

<回答>

これは純粹に技術的な要請で、ご指摘には同感だ。元々の原稿は、より重要であるパスカルの句読点を赤色で、編纂者である私が補足した句読点は黒色だった。しかし、色刷りにすると出版費用がかさむため、元々赤色で作成していたオリジナルの句読点は灰色に、編纂者として加えた句読点は黒色のままとなった。パスカルの句読点の方を黒色に変更し、編纂者の補足を灰色にする手もあったが、全体を書き換える作業量や誤植発生の危険性を考慮した。視覚的印象としては、パスカルの句読点が目立った方が良いのはたしかだが、やむをえない判断だったと

³⁵ <https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b52504189f/fl.item>

思う。

<質問③>

『パンセ』における編纂者の介入の大きさに対し読者の注意をあえて引くために、戦略的な意図で黒色にしたのかと想像していたが、現実はそうではなかったということだ。

<回答>

編纂者がかなり介入せざるをえないのは確かだ。しかし私のエディションでは、他の編纂者たちよりも介入をずっと減らしたいと思っていたので、自分の追加する句読点をとくに黒色で目立たせようとする意図はなかった。介入を避ける第二の方法は、自筆原稿と異筆原稿を分けることだ。こうすることで、各テキストの枠内に、私自身の句読点による介入以前に、別の介入が存在する危険性を回避できる（異筆原稿が、筆写の誤りあるいは意図的な改変すらも含む場合）³⁶。

【配列について】

<質問④>

編纂者の介入を最低に抑えようとするカンチオン版にも、やはり配列の点では編纂者の意図が入っているように思う。編纂作業におけるオリジナル尊重とのせめぎ合いという問題をどのように解決しようとしたのか。

<回答>

本質的な問題だ。

第一に、句読点における介入を必要最小限にとどめた。たとえばボワン（英語のピリオド）で終わっている文が疑問文の場合は、ボワンの疑問符への変更が必要だ。しかし、こうしたどうしても必要な場合以外は、何も変更しなかった。

第二に、著者（パスカル）による構成だといかなる仕方でも誤解されないよう

³⁶ ここでの「介入」は、カンチオン版編纂とは独立の、異筆写本における写字生の誤り、ポール・ロワイヤル編者などの介入の可能性を意味する。

な配列を工夫した。大半のエディションは、多かれ少なかれ、著者自身の構成を発見しようと努めてきた。著者が執筆を計画していたある著書が存在すると想像し、それが実際に書かれていたら、彼が従っていたであろう、という構成の発見である。たとえば、ジャック・シュヴァリエによる旧プレイヤード版(ミシェル・ルゲルンによるプレイヤード新版に先立つ、1954年の版)では、第一部を「神なき人間の悲惨」、第二部を「神と共にある人間の偉大」としている³⁷。ブランシュヴィック版では、パスカルの思想の論理を再発見しようとする。そして、ラフュマの諸版ならびにその原則にしたがって作成されたあらゆるエディションは、仮の形であるのは確かだが、著者自身が「キリスト教護教論のために」作成し、死によって固定された順序が存在するかのような前提に基づいて編纂されている。さて、パスカルが実際にある著書を執筆し、出版する計画を抱いていたとしよう。この最後のエディション群が考えるように、仮にこの順序が間違いなく完全にパスカルによるものであったとしても、それは、この著書の最終構想となったかもしれない状態とはほとんど関連のない、仮の配列の順序としての意味しかもたないだろう。その他のエディションが提示する構成については、企画されていた構想の再構成を目指そうが、ある思想の論理の再構成を目指そうが、いずれの場合も後世に伝えられたばらばらの<パンセ>を占有しようとする試みである。従って、それらは、著者の構想を再発見しようという隠れ蓑のもとに、編纂者の構想を押しつけようとする試みであり、つまりはパスカルに代わって編纂者自身を著者の地位に置こうとする試みにほかならない。私はといえば、読書が容易になるように、<パンセ>をいくつかのテーマ群に分け、読者のための道標^{みちしるべ}を提案することを選んだ。その道標がパスカル自身の構成と一致するかのような幻想を与えないように。

第三に、さきほど述べたように、原本は Gallica のサイトで閲覧可能であるが、私の版では脚注で、一つの<パンセ>が自筆原本のページ上でどのような位置を占めているかを示している(たとえば、「これこれの部分は左欄外に書かれている」

³⁷ Cf. S40-L6-Br60-C A129.

など)。この指示を読む読者は原本を参照し、私の版を片手に手書き原本を解説できる。これらの注によって、エディションのはらむ介入で最大のものの一つ、すなわち、元々の手稿原稿ではばらばらの部分に分かれて書かれているものを、印刷本ではページ上に線状に配置するという、避け難い介入を部分的に中和することが可能となる。

<質問⑤>

章の内部の配列については講演で触れられたが、章そのものの配列はどのようになされたのか。

<回答>

私は、人間のあり方に関わるあらゆる部分、つまり存在論的かつ人間学的な章群から始め、宗教的問題に文字通り真正面から取り組む専門的な問題が現れる章群で終えた。この配列は、諸版の伝統において構築されてきた他の複数の構想と類似している。最終章としたのは、一種の聖書学、とくに預言に関連する多くの<パンセ>を含む、膨大な章である。これらは『パンセ』の全体を理解するためには絶対的な本質をなすが、宗教を第一に扱うこれらの<パンセ>を冒頭に置くことは、パスカルが残したテキスト総体の正当な評価にはつながらないと考えた。というのも現在もまだ世界中で『パンセ』が読まれているのは、その人間論的次元、人間本性、人間のあり方、人間が宇宙（自然界）において占めるこの特異な位置、実際に人間はすぐれた理解能力をもっているが、にもかかわらず、人間がそこに投げ込まれた宇宙が人間を超越しているという事実についての主張によるからだ。これらはすべてある形のキリスト教〔ジャンセニズム〕に関連した考察に基づいてはいるが、それに限定はされない。そういうわけで、いわばより普遍的な章で始めることが重要であると考えた。これらの章は、キリスト教に近い人間、そうでない人間、どちらにも語りかける力をもっているからだ。これは非常に重要な点である。それで、まず「自然のうちで人間とは何か」の大きな第一章が来て、次に、特異な状態を具体的に述べる一たとえば「心情と理性」と同時に、『パンセ』における思考の歩みを一瞥するいくつかの章が続く。また、<パ

パスカル『パンセ』をいかに読むか『パンセ』の新版と「考える葦」(講演) アラン・カンチオン 沖本 龍哉・望月 ゆか

ンセ>をテーマ群に分けることで、言ってみれば簡潔な装いにした。パスカルの言葉遣いは、年を経るごとに難解さを増すが、それでもなお広範な読者に読んでもらうための工夫である。

【「考える葦」について】

<質問⑥>

異筆の部に H3 番として収録されている「考える葦」(ラフユマ版 200、セリエ版 232、ルゲルン版 186、ブランシュヴィック版 347) の 2 行「こうして私たちの尊厳の根拠はすべて考えることのうちにある。[…] だからよく考えるように努めよう。ここに道德の原理がある」まではポール・ロワイヤルの編者による偽筆 apocryphe である可能性をほのめかしておられる。しかし、[…] とした部分の原文 « C'est de là qu'il faut nous relever et non de l'espace et de la durée, que nous ne saurions remplir. » 中の « nous relever de » は、邦訳では「立ち上がる」のほか「頼みの綱とする」が提示されており、それほど簡単に意味が定まる表現ではないように思われる。前者は原罪から起き上がるというキリスト教的解釈が可能であり、後者はリトレが本断章に与えている釈義 « se rattacher à » を適用したものだ。ポール・ロワイヤルの編者たちは明晰性を重んじており、意味が定まらない単語を使うことは考えにくい。H3 がパスカルの文章ではないと言い切れるのだろうか。

<回答>

私のエディションをもとに、将来的には次のような発展的研究ができるのではないかと期待している。すなわち、すべての異筆<パンセ>を検討して、偽筆と考えられるものについて研究できれば、有益ではないか。したがって、« il faut nous relever » については、パスカルがもともと義務 (« il nous faut relever ») を表現しようとしていた際に、単語の順序を入れ替えて、« il faut nous relever » という現在の形にしたとリトレは考えた、しかし、それをはっきりとは言明していない、というのが私の抱いた印象だ。リトレは、« il faut nous relever » は「依存しなければならない il faut se rendre dépendant」を意味すると述べており、こ

れは〔« nous relever de » という代名動詞ではなく、「nous」を« il faut »の間接目的語（～にとって）として独立させた後に残る〕« relever de » のもつ語義のひとつ、「上位の権威に属する」に対応する。言い換えれば、「われわれにとって思考に属することが必要だ」、さらには「思考の威厳に属することが必要だ」という意味になる。こういうふうを考えながら、リトレはバスカル独自の、オリジナルな文体的言い回しとして、この箇所を理解した。

さて、ここで本<パンセ>の異筆原稿という性質を考慮すると、別の解釈の可能性が生まれる。それは写字生が単に« faut »と« nous »を入れ替えて筆写したというものだ。そしてこの誤りがそのままポール・ロワイヤル版と呼ばれるエディション（第23章「人間の偉大」、第6節）に反映されたということは十分にありえる。したがって、〔元々の筆記は« il nous faut relever »で、〕改変で« il faut nous relever »となったというのは不可能ではない。私にとってこの方向性を支持する後押しとなるのが、本<パンセ>（カンチオン版H3）の後半部の結論（「だからよく考えるように努めよう。ここに道德の原理があるTravaillons donc à bien penser, voilà le principe de la morale」）である。この命令は、以下のカンチオン版A46（ラフュマ756/セリエ626/ブランシュヴィック365）とは正反対だ。

^{パンセ}
断想

人間の尊厳の根拠はすべて考えのうちにある。しかしこの考えとは何か。^{パンセ}それは愚かなものではないか。したがって^{パンセ}考えは、その本性からいえば、素晴らしくまた比類のないものだ。そこによほど奇怪な欠陥があったのでなければ、^{パンセ}考えが軽蔑すべきものになるはずはない。しかしそこには、とんでもない欠陥があるので、これほど滑稽なものもない。^{パンセ}考えの本性とは何と偉大で、その欠陥は何と卑しいのだろう。〔岩波文庫（中）、塩川訳による〕

H3とA46の各冒頭部を読むと、一見、二つの<パンセ>は人間の思考を人間の尊厳として讃えるという共通の狙いをもっているように見える。しかし、この

パスカル『パンセ』をいかに読むか『パンセ』の新版と「考える葦」(講演) アラン・カンチオン 沖本 龍哉・望月 ゆか

第一文の直後で、自筆<パンセ>(A46)はもう一方と袂を分かち、『パンセ』で非常によく現れる批判的要因を導入する。したがってこの自筆テキストは、悲惨と偉大の二極のあいだを行き来する、対極的な対をなす一群の<パンセ>の典型的な例である。この<パンセ>を厳密に読めば、行き着くのは次の唯一の結論しかない——思考はたしかに素晴らしい、思考はたしかに人間のすべての威厳をなす。しかし、「それは愚かなもの」、「軽蔑すべき」で「卑しい」ものである。だから人間はよく考えることを妨げられている。その思考は欠陥があるからだ——。その帰結として、「よく考えるよう努める」はありえない。仮にそう努めたとしても、初めから負けが見えている。こういうわけで、私はカンチオン版H3の最終部分は、(自筆原稿 A46 によく表れているような)『パンセ』全体の趣旨に沿った言葉というよりは、『ポール・ロワイヤル論理学』全体の趣旨に沿った言葉に対応しているという印象を抱く。『パンセ』は人間精神の能力についてより批判的であるからだ(この点については、ルイ・マランの『言説批判』*La Critique du discours* 参照)。

(質疑応答翻訳：望月ゆか)

講演配布資料

灰色の句読点は原文による

Édition *Cantillon*

Je puis bien concevoir un homme sans mains, pieds, tête, car ce n'est que l'expérience qui nous apprend que la tête est plus nécessaire que les pieds. Mais je ne puis concevoir l'homme sans pensée. Ce serait une pierre ou une brute.

A40
R 222

Immatérialité de l'âme. Les philosophes qui ont dompté leurs passions, quelle matière l'a pu faire ?

A41
R 393

Les athées doivent dire des choses parfaitement claires, or il n'est point parfaitement clair que l'âme soit matérielle.

A42
R 63

Roseau pensant

A43
R 165

○

Ce n'est point de l'espace que je dois chercher ma dignité mais c'est du règlement de ma pensée, je n'aurai point d'avantage en possédant des terres. Par l'espace l'univers me comprend et m'engloutit comme un point, par la pensée je le comprends.

A44
R 63

.3.¹

×

L'homme n'est qu'un roseau, le plus faible de la nature, mais c'est un roseau pensant, il ne faut pas que l'univers entier s'arme pour l'écraser, une vapeur, une goutte d'eau suffit pour le tuer. Mais quand l'univers l'écraserait, l'homme serait encore plus noble que ce qui le tue, puisqu'il sait qu'il meurt et l'avantage que l'univers a sur lui. L'univers n'en sait rien.²

A45
R 169

Pensée. Fait la grandeur de l'homme.

A46
R 229

Pensée.

Toute la dignité de l'homme est en la pensée. Mais qu'est-ce que cette pensée ? Qu'elle est sotte ? La pensée est donc une chose admirable et incomparable par sa nature. Il fallait qu'elle eût d'étranges défauts pour être méprisable, mais elle en a de tels que rien n'est plus ridicule. Qu'elle est grande par sa nature, qu'elle est basse par ses défauts.

1. Le signe qui se trouve devant ce « 3 » ne nous semble pas pouvoir être pris pour un « H » ; c'est bien plus sûrement un de ces signes d'envoi et de renvoi qui parsèment tous ces papiers. Le découpage de la mise en recueil empêche de savoir vers quel autre segment il renvoie.

2. Les éditions donnent presque toujours comme suite et fin de cet autographe l'hétérographe H3, qui ne se trouve que dans les copies, et que ces copies placent à la suite de la présente pensée autographe ; ce qui, en lui donnant une sorte de moralité, conforme au propos édicteur général de la *Logique de Port-Royal*, rend secondaire l'affirmation anthropologique et ontologique à quoi, pourtant, cet autographe se limite.

Édition *Cantillon*

A47
R 21

Misère

Job et Salomon.

A48
R 83

Les villes par où on passe, on ne se soucie pas d'y être estimé, mais quand on y doit demeurer un peu de temps on s'en soucie. Combien de temps faut-il ? Un temps proportionné à notre durée vaine et chétive.

Entre nous et l'enfer ou le ciel il n'y a que la vie entre-deux qui est la chose du monde la plus fragile.

A49
R 63

Tout nous peut être mortel, même les choses faites pour nous servir, comme dans la nature les murailles peuvent nous tuer et les degrés nous tuer, si nous n'allons avec justesse.

A50
R 10

Le moindre mouvement importe à toute la nature, la mer entière change pour une pierre, ainsi dans la grâce la moindre action importe pour ses suites à tout, donc tout est important.

En chaque action il faut regarder, outre l'action, à notre état présent, passé, futur, et des autres, à quoi elle importe, et voir les liaisons de toutes ces choses, et lors on sera bien retenu.

Quand je considère la petite durée de ma vie absorbée dans l'éternité précédente et suivante, *memoria hospitii unius diei praetereuntis*¹, le petit espace que je remplis et même que je vois, abîmé dans l'infinie immensité des espaces que j'ignore et qui m'ignorent, je m'effraie et m'étonne de me voir ici plutôt que là, car il n'y a point de raison pour quoi ici plutôt que là, pour quoi à présent plutôt que lors.² Qui m'y a mis, par l'ordre et la conduite de qui ce lieu et ce temps a-t-il été destiné à moi ?

A51
R 67

Édition *Sellier*

143

Je puis bien concevoir un homme sans mains, pieds, tête, car ce n'est que l'expérience qui nous apprend que la tête est plus nécessaire que les pieds. Mais je ne puis concevoir l'homme sans pensée. Ce serait une pierre ou une brute.

144

Instinct et raison, marques de deux natures.¹

145

Roseau pensant.



Ce n'est point de l'espace que je dois chercher ma dignité, mais c'est du règlement de ma pensée. Je n'aurai point d'avantage en possédant des terres. Par l'espace l'univers me comprend et m'engloutit comme un point, par la pensée je le comprends.

146

La grandeur de l'homme est grande en ce qu'il se connaît misérable.

Un arbre ne se connaît pas misérable.

C'est donc être misérable que de [se] connaître misérable, mais c'est être grand que de connaître qu'on est misérable.²

147

Immatérialité de l'âme. Les philosophes qui ont dompté leurs passions, quelle matière l'a pu faire ?³

¹ Éd. *Cantillon* :

« Instinct et raison marques de deux natures. »
[H41 (PC 39) « Le cœur et la raison »]

² Éd. *Cantillon* :

« La grandeur de l'homme est grande en ce qu'il se connaît misérable.
Un arbre ne se connaît pas misérable.
C'est donc être misérable que de <se> connaître misérable mais c'est être grand que de connaître qu'on est misérable. »
[A148 (R 165) « Renversement continu du pour au contre »]

³ Toutes ces pensées se trouvent dans le chapitre (la « liasse ») « Grandeur ».

Édition *Sellier*

231

H. 3.¹

× L'homme n'est qu'un roseau, le plus faible de la nature, mais c'est un roseau pensant. Il ne faut pas que l'univers entier s'arme pour l'écraser, une vapeur, une goutte d'eau suffit pour le tuer. Mais quand l'univers l'écraserait, l'homme serait encore plus noble que ce qui le tue, puisqu'il sait qu'il meurt et l'avantage que l'univers a sur lui. L'univers n'en sait rien.

232

Toute notre dignité consiste donc en la pensée. C'est de là qu'il faut nous relever, et non de l'espace et de la durée, que nous ne saurions remplir.

Travaillons donc à bien penser. Voilà le principe de la morale.

233

Le silence éternel de ces espaces infinis m'effraie.²

234

Consolez-vous, ce n'est point de vous que vous devez l'attendre, mais au contraire en n'attendant rien de vous que vous devez l'attendre.³

¹ Vient immédiatement à la suite de la grande pensée des deux infinis, dans le chapitre (la « liasse ») « Transition de l'homme à Dieu. »

² Éd. *Cantillon* : H1 (PC 101), même texte ; « Qu'est-ce qu'un homme dans l'infini ? »

³ Éd. *Cantillon* : A559 (R 63), même texte ; « Religions contraires ».

Édition *Le Guern*

102

Je puis bien concevoir un homme sans mains, pieds, tête, car ce n'est que l'expérience qui nous apprend que la tête est plus nécessaire que les pieds. Mais je ne puis concevoir l'homme sans pensée. Ce serait une pierre ou une brute.

103

Instinct et raison, marques de deux natures.¹

104

Roseau pensant.

Ce n'est point de l'espace que je dois chercher ma dignité, mais c'est du règlement de ma pensée. Je n'aurais point davantage en possédant des terres. Par l'espace, l'univers me comprend et m'engloutit comme un point ; par la pensée, je le comprends.

105

La grandeur de l'homme est grande en ce qu'il se connaît misérable ; un arbre ne se connaît pas misérable.

C'est donc être misérable que de <se> connaître misérable, mais c'est être grand que de connaître qu'on est misérable.²

106

Immatérialité de l'âme.

Les philosophes qui ont dompté leurs passions, quelle matière l'a pu faire ? ³

¹ Éd. *Cantillon* :
« Instinct et raison marques de deux natures. »
[H41 (PC 39) « Le cœur et la raison »]

² Éd. *Cantillon* :
« La grandeur de l'homme est grande en ce qu'il se connaît misérable.
Un arbre ne se connaît pas misérable.
C'est donc être misérable que de <se> connaître misérable mais c'est être grand que de connaître qu'on est misérable. »
[A148 (R 165) « Renversement continu du pour au contre »]

³ Toutes ces pensées se trouvent dans le chapitre (la « liasse ») « Grandeur ».

Édition *Le Guern*

186

H. 3.¹

× L'homme n'est qu'un roseau, le plus faible de la nature, mais c'est un roseau pensant. Il ne faut pas que l'univers entier s'arme pour l'écraser ; une vapeur, une goutte d'eau suffit pour le tuer. Mais quand l'univers l'écraserait, l'homme serait encore plus noble que ce qui le tue puisqu'il sait qu'il meurt et l'avantage que l'univers a sur lui, l'univers n'en sait rien.

Toute notre dignité consiste donc en la pensée. C'est de là qu'il faut nous relever et non de l'espace et de la durée, que nous ne saurions remplir.

Travaillons donc à bien penser : voilà le principe de la morale.

187

Le silence éternel de ces espaces infinis m'effraie.²

188

Consolez-vous ; ce n'est pas de vous que vous devez l'attendre, mais au contraire en n'attendant rien de vous que vous devez l'attendre.³

¹ Vient immédiatement à la suite de la grande pensée des deux infinis, dans le chapitre (la « liasse ») « Transition de l'homme à Dieu. »

² Éd. *Cantillon* : H1 (PC 101), même texte ; « Qu'est-ce qu'un homme dans l'infini ? »

³ Éd. *Cantillon* : A559 (R 63), presque le même texte (virgule après « Consolez-vous ») ; « Religions contraires. »

『パンセ』引用【カンチオン版】

カンチオン版

〔＊原文引用集では、バスカル自筆による句読点が灰色で区別されているが、翻訳では割愛せざるを得なかった。〕

〔訳文は、塩川徹也訳『パンセ』岩波文庫版を借用した。句読点（「。」「,」）は必ずしも原文と一致しないが、断章タイトルのみ、原文のピリオドの有無を反映した。〕

〔便宜上、各引用の終わりには、カンチオン版巻末の対照表に従い、セリエ版 S、ルゲルン版 LG、ラフュマ版 L、ブランシュヴィック版 Br の断章番号を添えた。塩川訳『パンセ』の断章番号はラフュマ版と異なる場合のみ記載した。カンチオン版で連続している断章番号を、とりわけ写本に依拠する S、LG、L 版の番号と対照すると、その配列の独自性を垣間見ることができる。〕

A40 (R222) 〔自筆の部断章 40、原本集 222 ページ（以下同様）〕

手足も頭もない人間を私は思い描くことができる。足より頭のほうが必要であることを私たちに教えてくれるのは、経験しかないのだから。しかし私は、思考を欠いた人間を思い描くことはできない。そんなものがあるとすれば、石ころか獣だろう。

〔S143-LG102-L111-Br339〕

A41 (R393)

魂の非物質性。おのれの情念を抑制した哲学者たちがいるが、それを可能にしたのは、いかなる物質なのか。

〔S147-LG106-L115-Br349〕

A42 (R63)

無神論者の言うことは、完全に明白でなければならない。だが魂の物質性が完全に明白かといえば、そうは言えない。

〔S193-LG150-L161-Br221〕

A43 (R165)

考える輩

自分の尊厳の根拠、それを私は空間に求めてはならない。自分の思考を整えることに求めなければならない。私は、土地を所有したところで、優位に立つわけではない。空間によって、宇宙は私を包み込み、一個の点のように私を飲み込む。思考によって、私は宇宙を包み込んで理解する。

〔S145-LG104-L113-Br348〕

- × A44 (R63)
- 3¹ 人間は一本の葦にすぎない。自然のうちで最も弱いもの、しかしそれは考える葦だ。人間を押しつぶすのに宇宙全体が武装する必要はない。一吹き

の蒸気、一滴の水だけで人間を殺すのには十分だ。しかし宇宙に押しつぶされようと

も、人間は自分を殺すものよりさらに貴い。人間は自分が死ぬこと、宇宙が自分より優位にあることを知っているのだから。宇宙はそんなことは何も知らない²。

〔S231-LG186-L200-Br347〕

A45 (R169)

考えが人間の偉大さを作り出す。

〔S628-LG638-L759-Br346〕

A46 (R229)

断想。

人間の尊厳の根拠はすべて^{パンセ}考えのうちにある。しかしこの^{パンセ}考えとは何か。それは愚かなものではないか。したがって^{パンセ}考えは、その本性からいえば、素晴らしいくまた比類のないものだ。そこによほど奇怪な欠陥が^{パンセ}あったのでなければ、^{パンセ}考えが軽蔑すべきものになるはずはない。しかしそこには、とんでもない欠陥があるので、これほど滑稽なものもない。考えの本性は何と偉大で、その欠陥は何と卑しいのだろう。

〔S626-LG636-L756-Br365〕

A47 (R21)

はじめさ

ヨブとソロモン。

〔S103-LG65-L69-Br174〕

A48 (R83)

通りすがりの町、そこでわざわざ評判を気にかけることはない。しかしほ

¹ 【原注】この「3」の前にある印は、〔通常考えられているように〕「H」と解釈できるようには思えない。これら〔『パンセ』の〕すべての紙片に散在している送り記号のひとつと考える方がより確実である。原本集に貼り付けられる際に紙片の縁が切り落とされたため、この記号がどの部分に送っているのか知ることはできない。

² 【原注】諸版ではほぼ常に、この自筆の続きと締めくくりとして異筆H3番を置いている。これは写本にしか存在せず、写本においてこの自筆＜パンセ＞の直後に配列されている。これは、自筆＜パンセ＞に対し、ポール・ロワイヤル論理学の一般的な教化の意図に合致する、一種の道徳性を付与する。本自筆＜パンセ＞の主張は人間学的かつ存在論的なものに限定されているのだが、その主張が副次的なものにされてしまっている。

『パンセ』引用【カンチオン版】

んの一時でも滞在することになれば、気にかかる。だが一時といっても、どれほどの時間が必要なのか。私たちのむなしくはかない人生に相応する時間だ。

[S65-LG29-L31-Br149]

A49 (R63)

私たちと地獄あるいは天国の間に横たわっているのは、私たちの人生だけだ。そして世の中にこれほどはかないものはない。

[S185-LG142-L152-Br213]

A50 (R10)

すべてが、私たちにとって致死の原因となる。私たちの役に立つためにつくられたものにいたるまでそうだ。たとえば自然においては、城壁は私たちを殺すことができる。階段も、足を踏み外せばそうだ。

ほんの些細な動きも自然全体に影響する。一個の石くずれで海全体が変化する。同様に、恩恵においても、ほんの些細な行動がその結果によって全体に影響する。だからすべてが重要である

それぞれの行動において、行動の他に、私たちの現在・過去・未来の状況、そしてその行動が影響を及ぼす他の状況に注目し、それらすべての事柄の関連を見なければならぬ。そうすれば、私たちは慎重になるだろう。

[S756-LG722-L927-Br505-塩川*17]

A51 (R67)

私の一生のささやかな時間が、それに先立ちまた引き続く永遠の中に、「通り過ぎてゆく一夜の客の思い出」のように吞み込まれるのを眺め、私が占めるささやかな空間、いや私が見ている空間までもが、私が知らず私を知らない空間の無限の広がりには吸い込まれるのを眺めるとき、私は恐れにおそわれ、自分があそこではなくここにいることに驚き怪しむ。あそこよりここにいる理由はないのだから。どうしてあの時より今なのか。誰が私をここに置いたのか。誰の命令、誰の導きによって、この場所とこの時が私に割り当てられたのか。

[S102-LG64-L68-Br205]

『パンセ』引用【セリエ版】

セリエ版

〔訳文は、塩川徹也訳『パンセ』岩波文庫版を借用した。句読点(「。」「,」)は必ずしも原文と一致しない。〕

〔原注では、カンチオン版の断章テキストが引用されている。句読点に関する場合、一部訳注で代用した。〕

〔「[VII] 偉大さ」のセクションより〕

S143

手足も頭もない人間を私は思い描くことができる。足より頭のほうが必要であることを私たちに教えてくれるのは、経験しかないのだから。しかし私は、思考を欠いた人間を思い描くことはできない。そんなものがあるとすれば、石ころか獣だろう。

S144

本能と理性、二つの本性を示すしるし¹。

S145

考える葦。

自分の尊厳の根拠、それを私は空間に求めてはならない。自分の思考を整えることに求めなければならない。私は、土地を所有したところで、優位に立つわけではない。空間によって、宇宙は私を包み込み、一個の点のように私を飲み込む。思考によって、私は宇宙を包み込んで理解する。

S146

人間の偉大さは、自分が**みじめ**であることを自覚しているところにある。

一本の立ち木は自分が**みじめ**だとは思わない。

だから自分が**みじめ**だと思うのは**みじめ**なことだが、〔自分が²〕 **みじめ**だと自覚するのは偉大なことだ³。

¹ 〔原注〕カンチオン版では、…〔引用省略、訳注：「本能と理性 Instinct et raison」の後のカンマなし〕(H41、第一写本 39、「心と理性」のセクション)

² 〔訳注〕〔 〕は編者による補足。

³ 〔原注〕カンチオン版では、…〔引用省略、訳注：mais の前、日本語では「ことだが」の後のカンマなし〕(A148、原本集 165、「正から反への絶えざる逆転」)

S147

魂の非物質性。おのれの情念を抑制した哲学者たちがいるが、それを可能にしたのは、いかなる物質なのか⁴。

〔[XVI] 人間の認識から神への移行〕のセクションより〕

S231

×

H. 3⁵

人間は一本の草にすぎない。自然のうちで最も弱いもの、しかしそれは考える草だ。人間を押しつぶすのに宇宙全体が武装する必要はない。一吹き蒸気、一滴の水だけで人間を殺すのに十分だ。しかし宇宙に押しつぶされようと、人間は自分を殺すものよりさらに貴い。人間は自分が死ぬこと、宇宙が自分より優位にあることを知っているのだから。宇宙はそんなことは何も知らない。

S232

こうして私たちの尊厳の根拠はすべて考えることの中にある。私たちの頼みの綱はそこにあり、空間と時間の中にはない。空間も時間も、私たちが満たすことはできないのだから。

だからよく考えるように努めよう。ここに道徳の原理がある。

S233

永遠に沈黙するこの無限の空間、それを前にして私は戦慄する⁶。

S234

心慰めるがよい。きみは自分を当てにして、それを待望すべきではない。かえって自分には何も期待しないことによって、それを待望すべきなのだ⁷。

⁴ 【原注】これらの断章はすべて、「偉大さ」の章（「東」）に見出される。

⁵ 【原注】本断章は、「人間〔の認識〕から神への移行」の章（「東」）における、二つの無限についての長大なくパンセ>の直後に続いている。

⁶ 【原注】カンチオン版ではH1（第一写本 101）、セリエ版と同一テキスト：「無限の中であって、人間とは何か」のセクション。

⁷ 【原注】カンチオン版ではA559（原本63）、セリエ版とほぼ同一テキスト（「心慰めるがよい Consolerez-vous」の後にはカンマ）：「互いに対立する宗教」のセクション。

『パンセ』引用【ルゲルン版】

ルゲルン版

〔訳文は、塩川徹也訳『パンセ』岩波文庫版を借用した。句読点(「。」「,」)は必ずしも原文と一致しない。〕

〔原注では、カンチオン版の断章テキストが引用されている。句読点に関する場合、一部訳注で代用した。〕

〔「VI 偉大さ」のセクションより〕

LG 102

手足も頭もない人間を私は思い描くことができる。足より頭のほうが必要であることを私たちに教えてくれるのは、経験しかないのだから。しかし私は、思考を欠いた人間を思い描くことはできない。そんなものがあるとすれば、石ころか獣だろう。

LG 103

本能と理性、二つの本性を示すしるし¹。

LG 104

考える葦。

自分の尊厳の根拠、それを私は空間に求めてはならない。自分の思考を整えることに求めなければならない。私は、土地を所有したところで、優位に立つわけではない。空間によって、宇宙は私を包み込み、一個の点のように私を飲み込む。思考によって、私は宇宙を包み込んで理解する。

LG 105

人間の偉大さは、自分が¹みじめであることを自覚しているところにある。
一本の立ち木は自分がみじめだとは思わない。

だから自分がみじめだと思うのはみじめなことだが、〔自分が²〕みじめだと自覚するのは偉大なことだ³。

¹ 〔原注〕カンチオン版では、…〔引用省略、訳注：「本能と理性 Instinct et raison」の後のカンマなし〕(H41、第一写本 39、「心と理性」のセクション)

² 〔訳注〕〔 〕は編者による補足。

³ 〔原注〕カンチオン版では、…〔引用省略、訳注：mais の前、日本語では「ことだが」の後のカンマなし〕(A148、原本集 165、「正から反への絶えざる逆転」)

『パンセ』引用【ルゲルン版】

LG 106

魂の非物質性。おのれの情念を抑制した哲学者たちがいるが、それを可能にしたのは、いかなる物質なのか⁴。

〔「XVI」人間の認識から神への移行〕のセクションより〕

LG 186

×

H. 3⁵

人間は一本の草にすぎない。自然のうちで最も弱いもの、しかしそれは考える草だ。人間を押しつぶすのに宇宙全体が武装する必要はない。一吹き、一滴の水だけで人間を殺すのに十分だ。しかし宇宙に押しつぶされようとも、人間は自分を殺すものよりさらに貴い。人間は自分が死ぬこと、宇宙が自分より優位にあることを知っているのだから。宇宙はそんなことは何も知らない。

こうして私たちの尊厳の根拠はすべて考えることのうちにある。私たちの頼みの綱はそこにあり、空間と時間のうちにはない。空間も時間も、私たちが満たすことはできないのだから。

だからよく考えるように努めよう。ここに道徳の原理がある。

LG 187

永遠に沈黙するこの無限の空間、それを前にして私は戦慄する⁶。

LG 188

心慰めるがよい。きみは自分を当てにして、それを待望すべきではない。かえって自分には何も期待しないことによって、それを待望すべきなのだ⁷。

⁴ 【原注】これらの断章はすべて、「偉大さ」の章（「東」）に見出される。

⁵ 【原注】本断章は、「人間〔の認識〕から神への移行」の章（「東」）における、二つの無限についての長大なくパンセ>の直後に続いている。

⁶ 【原注】カンチオン版では H1（第一写本 101）、ルゲルン版と同一テキスト：「無限の中にあつて、人間とは何か」のセクション。

⁷ 【原注】カンチオン版では A559（原本 63）、ルゲルン版とほぼ同一テキスト（「心慰めるがよい Consolerez-vous」の後はカンマ）：「互いに対立する宗教」のセクション。